日本人の心

川端康成氏のノーベル文学賞受賞は、遠い世界にばかり向けられがちであった日本人の目を、もう一度みずからの足もとにもどすことの重要さを、さとらせてくれたようである。昨年十一月十七日の朝日新聞は、同月十二日、ストックホルムのスウェーデン・アカデメーでなされた、川端氏の「美しい日本の私―その序説」と題する受賞記念講演の全文を掲載した。古代・中世・近世にわたる文人・僧侶の詩歌や伝統芸能などを引用しながら、「日本人の心」を語ったもので、冒頭に道元禅師と明恵上人の歌が一首ずつ掲げられている。明恵は、『明恵上人歌集』に入るつぎの歌である。

雲をいでて我にともなふ冬の月風や身にしむ雪や冷めたき

川端氏は、この歌と、道元の「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえて冷(すず)しかりけり」の歌とを、揮毫を求められた折に書くことがあるという。明恵の歌については、

雲に入ったり雲を出たりして、禅堂に行き帰りする我の足もとを明るくしてくれ、狼の吼え声もこはいと感じさせないでくれる「冬の月」よ、風が身にしみないか、雪が冷めたくないか。私はこれを自然、そして人間にたいする、あたたかく、深い、こまやかな思ひやりの歌として、しみじみとやさしい日本人の心の歌として、人に書いてあげてゐます。

と述べている。「狼の吼え声も云々」は、引用歌のあとに抄出された長い詞書に、坐禅をすませた後、「峰の房より下房へ帰る時、月雲間より出でて、光り雲にかがやく。狼の谷に吼ゆるも、月を友として、いと恐ろしからず」とあるのをさす。

「自然、そして人間にたいする、あたたかく、深い、こまやかな思ひやり」といい、「しみじみとやさしい日本人の心」ともいう。そういう心は、「もののあはれ」をしる心と別ではない。和辻哲郎氏が、『『もののあはれ』は女の心に咲いた花である」といっているように、「もののあはれ」は、苦悩にみちた王朝女性の心から生まれた生活理想であり、美的理念であった。同時に、女性の心から生まれた「もののあはれ」は、必然的に優柔体であった。優柔体でありながら、どこか一筋の厳しいものが貫いていることを見のがしてはならない。それは、「もののあはれ」をしることが、人間評価の規準とされたという点からもいえる。それを「しる」心を持たないものは、王朝の貴族社会では人間としてだめな人であると烙印を押されたも同然であった。

明恵上人が、禅堂に行き帰りする道を照らしてくれる冬の月へ、三十一文字であたたかく呼びかけた心を、とくに「日本人の心」として、川端氏がその講演の最初にとりあげたことは、意義の深いことと思う。これは、機械文明の急激な進歩と人間の心とのギャップに、深刻な苦悩をつづける世界の人々、とりわけ西欧の人々に対する、「美しい日本の私」からの問いかけであったと同時に、日本人の一人一人に、「脚下照顧」の喫緊であることを啓示したものともうけとれるのである。

（四四・二）